１．研究会「カロリング期の教会と国家　―史料論からの視点―」

日程：2010年7月31日（土）13時30分から
場所：九州大学文学部西洋史学研究室
テーマ：「カロリング期の教会と国家　―史料論からの視点―」
報告：
　丹下　栄「カロリング期エリート論の可能性」
　梅津教孝「シャルルマーニュの文書はどのように読まれていたのか
　　―ミュルバク修道院宛ての2通の確認文書（772年、775年）を素材として―」
　津田拓郎「カロリング期のカピトゥラリア
　　―同時代人は「カピトゥラリア」をどのように認識していたか―」
コメント：加納修

カロリング期の教会と国家をテーマに研究会を開催した。研究会メンバーに加えて、最近、この領域で目覚ましい成果を挙げておられる若手研究者を報告者として招聘するとともに、中世初期史研究の世界的権威であり、証書史料論にはとりわけ造詣が深い加納修氏に、特にコメントをお願いした。

中世初期史研究において、圧倒的な重要性を依然として占めているのはカロリング期への関心である。とりわけ興味深いのは、従来の法制史、社会経済史的関心から、広義の政治文化論とも呼びうる問題系への関心の登場であり、そこでは、史料をめぐっての考察が議論の要に位置することがしばしばみられる。新しい問題関心と方法論によるさまざまな研究が交錯する研究の現状を受けて、今回の研究会では、史料論の観点から、国家と教会が一体化した特異な国家＝社会の理念と機能の問題に取り組んだ。この際、行為の文字化のあり方とその意義、さらには担い手をめぐる諸問題が重要な論点となることが予想された。

丹下報告では、所領明細帳と証書を例にとりながら、法行為や現象の文字化をいわば世界認識の表れとしてとらえ、そのような特異な行為を担った人間集団を「エリート」として析出することから、カロリング期の文字文化のあり方を再照射することを提言する。この作業は同時に、歴史家が過去の痕跡として認識するかぎりでの「史料」認識とその読解についても、貴重な示唆を与えてくれるだろう。梅津報告は、カロリング王文書におけるラテン語水準の検討というやや限定された課題についての綿密な検討をとおして、王文書局書記のラテン語運用能力のみならず、王文書の形態的問題（省略記号）やその具体的運用（口頭での読み上げ）のあり方について論じ、ひいてはこの時期の王証書の持つ価値にも言及する。古典的な実証手続きの積み重ねが、近年盛んな文書の記号論や機能論にも貴重な貢献となりうることを示す貴重な事例研究と言える。津田報告は、カピトゥラリア研

究の刷新状況を受けて、あらためて、この王朝の最初の三代を対象として、「王の行為の文字化」それ自体を再検証しようとする。研究史と史料状況の両面にわたってまちかまえる陥穽の罠をかいくぐって、当該時期の資料認識のあり方をも問う野心的な研究である。加納氏には、それぞれの報告について、研究動向および史料操作の両面にわたるコメントをいただいた。

研究会全体を通じて、中世初期史の、とりわけ史料認識をめぐる諸問題についての最新の動向の一旦に触れることができただけではなく、独自の方法論上の工夫による実証研究の実例に接することができた。

ここではまず、各報告者によって、この報告書のためにあらたに書き下ろされた原稿を掲載した。つづいて、当日コメントをお願いした加納氏にも、同じく書き下ろし原稿をご寄稿いただいた。さらに、森貴子氏からは、当日交わされた議論も含めて、イングランド初期史を専門とする立場からのコメントを頂戴した。いずれも、相互に補い合いながら、西欧中世初期史における史料論研究の現在を表す内容といえる。あわせてご参照いただきたい。